

同志社研修・交流会
国際中学校・高等学校

スーパーグローバルハイスクール

(SGH)の構想実現

同志社国際中学校・高等学校 校長

かわい くにたか
川井 国孝

留学離れの危機感から
生まれたSGH構想

まずスーパーグローバルハイスクール（※以下、「SGH」と表記）構想が生まれた経緯についてお話しします。この構想が生まれた背景には、日本人の若者の留学離れという非常に大きな要因がありました。例えばアメリカの大学の学部課程に在籍する留学生数を見ますと、2009年度の日本人留学生は2万9200人でしたが、2000年度比では52

%減です。それに対して09年度の韓国からの留学生数は7万5000人、中国・インドからはそれぞれ10万人を超えています。高校生についても、2008年度に3カ月以上アメリカに留学していた日本人生徒数は、2000年度比で30%減の3000人です。大学生全体についての留学に関する意識調査では、留学を「したくない」が全体の40.4%、「したい」が32.8%。理系男子では「したくない」が49.2%、「したい」が20.3%というデータがあります。様々な理由があるか

と思います。敢えてリスクをとって海外で勉強する必要はないという考え方もあるでしょうし、日本では日本語を使つてかなりレベルの高い学問が修得できるといふ状況もあります。最近、大学生の皆さんには就職活動への影響もあるかと思ひます。

しかし留学生数の減少は、政府や企業に非常に大きな不安を与えています。どういふことかという点、将来世界を動かしていく政治家あるいは企業家の輪の中に、日本人が入らない、入れない。そう

いう時代がそのうち来るのではないかという心配です。世界を動かすのも国を動かすのも、結局個人と個人のつながりによるのです。それは国のトップにしても同じことだと思ひます。そういうところで日本人が輪の中に入つていけないという状況を、非常に心配する動きがありました。

それに対応するための行政の動きが、2013年5月、教育再生実行会議第3次提言素案に盛り込まれました。2つの柱があります。一つは「一部日本語によ



るIBDP（国際バカロレア・ディプロマプログラム）の開発・導入」の推進です。IB認定高校の大幅な増加を目指すという点で、現在の16校を2018年には200校に増やす。これは、IBDPを取った子どもたちの多くが海外の大学に進学するだろうということから考えられた施策かと思ひます。もう一つの柱が「グローバルリーダーを育成する先進的な高校をSGHに指定し、支援することです。子どもたちが英語を使う機会を拡大し、幅広い教養と問題解決能力の育成を行う学校をSGHに指定するものです。おそらくこの段階でのSGH構想は非常に漠然としたもので、あまり的を絞れているものではなかったと思ひます。この構想の、2014年度の応募状況を見てみます。本校もチャレンジしたのですが、応募総数が246校、指定校56校、アソシエイト校が54校。本校はアソシエイト校に指定されました。指定されましたが、何の義務も責任もなく、ただ仲間の情報交換の輪に入れてもらえるというだけのものです。2015年度は、応募総数190校、指定校56校、アソシ

エイト校55校。指定校数はどちらの年度も56校です。2014年度は国立・公立が38校、私立は18校、2015年も国立・公立が38校、私立は18校。見事に2対1の比率です。この数字の揃い方には、なかなか恣意的なものを感じます。我々の学校はどうなのかということを検討した結果、教職員の総意でこの構想に応募することに決めましたが、校長の唐突な命令で、とにかくやれと言われて来ましてという学校もたくさんあります。私学はどこも、生き残りをかけて必死です。

SGH構想の変化

文科省がSGH構想について書いたものを比較してみました。①2013年秋②2014年度指定校決定後③2015年1月の3つを比較すると、内容が少しずつ変化しているのです。①では、目的として「語学力」を身につける、事業概要としては「外国語（特に英語）を使う機会の飛躍的増加」という記載があります。つまり2013年のSGH構想発表時では、明らかに英語力強化をメインに



想ができれば海外の大学は当たり前のように進路になってくるでしょう」と書いてあります。SGH構想には、そういう

していました。そして主な取り組みとして「人文科学・社会科学分野の先進的な教育課程の開発・実践」とありました。分かりやすく言いますと、それまでに行われていた「スーパーサイエンスハイスクール」事業の文系版という意味で、SGH構想が生まれたのだと思います。

ところが②2014年度の指定校決定後、変化が見られます。①で目的に「語学力」と書いてあった箇所は②では「コミュニケーション能力」に置き換わっています。①にあった「外国語を使う機会の飛躍的増加」という記載は、②では消えています。最初の構想では語学力強化がメインのプログラムだったものが、課題研究などの方に重点をシフトしてきた。ちなみに①の構想時、大学との連携としては「単位認定を含む高大連携プログラムの提供」とあります。これは実際に大学の先生が高校に来て何かをされたことを単位として認定する、そういうプログラムを作りなさいということですね。また、「入試の改善による生徒の学習内容の適切な評価」という項目もありました。例えば筑波大学は、SGHの1年目であ

る今の高校2年生からスーパーグローバル入試をする」と明言されました。ということは、こういうプログラムをやっている子どもたちは、独自の取り組みを評価して大学への道を開くという意味です。それを大学側にも要求するという構想です。

また①②では、主な取り組み項目として「帰国・外国人生徒の積極的受入れ」とありますが、2015年の③では消えました。予算は、2014年度56校で8億円、1校あたり1600万円です。2015年度には112校で11億円、1校約1000万円弱。どんどんこのように内容や規模が変わってきています。今後どうなるか分かりませんが、変化しつつある構想だということです。

同志社国際高校のSGH応募までの経緯

文科省の最初のSGH構想では「帰国生徒・外国人生徒の積極的受入れ」「外国教員の採用」「課題発見・解決型学習」「外国語教育の強化、卓越した英語力」「海

印象があるんですね。また翌年は、こうも書いてあります。「246校にも上る申請の中から約4・4倍という難関をくぐり抜けて選りすぐられた学校です」「もちろん英語で授業を行うことは普通になりますから、SGHを志望するには相当な英語力が求められるのも確かです」。そして今回の結果を受けて、2015年にはこんな記事があります。「今回の新規指定校は、全国190校の応募から実質3・4倍の難関をくぐり抜けて指定を得ました」。学校に対するこのような外部機関の評価は、世間に対して非常に大きな影響を与えます。我々の学校、特に帰国生徒受け入れ校の生徒募集は非常に大きな影響を受けるということです。

先ほど、私たちは2014年度のSGH構想申請をすることを教職員会議で決議したと言いました。その後は委員会を組織して、10名の委員でこの申請作業に取り組んでいきました。2014年1月に初めて正式に公募され、2月に締め切りでした。私たちは直接文科省に出すのではなく京都府を通して申請を出しますので、タイムロスがあります。つまり実

外の高校や大学との連携」が挙がっていました。これは実に、本校が今までずっと積み重ねてきたことと、あまりにも内容が重なっていました。我々がずっとやってきたことについて、当初の計画では3000万円近い補助金をもらって我々と似たことをする学校が全国に100校も200校もできる、そういうことでした。これは私たちにとても非常に脅威でした。とても無視できる状況ではありません。帰国生徒受け入れ校にとって、この構想は対応を間違えると死活問題になる、という判断をしたわけです。そして教職員全員で協議をして、応募を決めました。

今お話しした「帰国生徒受け入れ校にとっては死活問題」ということは、外部の風評という問題もあります。世間的に指定校はグローバル教育やグローバル人材の育成において、レベルの高い学校であるという評価をされるでしょう。しかし、これは実態とは違っています。

ベネッセ教育情報サイトを見ますと、こういう情報があります。文科省の方でもないのに、2013年には「SGH構想は公募発表から締め切りまで3週間しかなく、その中で約40ページの構想調書を作る必要がある、そのための説明の文書が約90ページあったのです。これらのものを正しく書いていかなければいけないので、その期間はみんな遅くまで残って作業をしてくれました」。

また、私たちがこの構想を書いていくためには、学内だけですべてが完結するわけではありません。大学との協力が不可欠です。また、外部運営指導委員は同一法人内の人には依頼できないことになっているため、京都新聞論説委員の方や京田辺市役所の方、いろんな方に入ってくださいました。それから購入人物、レンタル、印刷などの見積書の準備、高校生全員の英語資格確認や集計など、かなり準備が大変でした。

結果は、1年目は文科省の望んでいる構想とはちょっと違って、非常に同志社国際らしい構想を提案し、アソシエイト校になりました。アソシエイトと言えは聞こえはいいですが、要するに不採択です。アソシエイトになっている間は我々には何の義務もありませんので、委員会

では生徒たちの色々な国際的活動に対する支援をたくさんしてきました。グローバルエンタープライズチャレンジや、OECDプログラムなどのサポートをしてきて、2015年の新たな応募の準備にも入りました。2年目も再挑戦を会議で決めまして、2015年度の委員会は、昨年度の委員に加えて授業担当の山本教諭を委員長として、11名で組織しました。この委員会で行った再挑戦によって、2回目は採択されたということです。

SGH校の果たすべき役割

SGH指定校の応募要件は3点あります。まず「グローバルイシューに関する課題研究」でないといけない。これは推奨ですが、「総合的な学習の時間の活用」を推奨されます。そうしたほうがポイントが高いようです。2点目については、我々はラッキーでした。「国際化を進める大学との連携」が必須という点です。この大学とは、グローバル30とかグローバル30プラス、SGU（スーパーグローバル大学創成支援）などに採択されている

る大学でないといけないんですね。同志社大学はG30、G30プラスに採択されていますので、連携ができたのです。3点目は「指定期間終了後、つまり国の支援終了後も、自前で構想を継続すること」です。

SGHがしなければならぬことは何でしょうか。これは新しい教育課程の開発研究と実践なんですね。形の上では文科省と法人同志社との間で、教育課程の開発研究の委託契約を締結するわけです。研究開発の内容・方法は、先ほどお話しした構想調書に書かれています。私たちはその構想に書かれていることをきちっと進めていき、その結果、子どもたちがどう変わったかということを、多面的・客観的に、数値で報告することが求められます。例えば海外留学に行った生徒が何名になったとか、英語の資格で何点以上の生徒が何人いるとか、客観的な押さえをしていく必要があります。我々が進めていく構想を、本当はどうだったかを客観的に検証していくのがSGH校の私たちに与えられている責任、義務です。

したがって、指定校になったからといって、さあこれから自由にいろいろ研究しようということではできません。同志社国際高校では、同志社らしい良さでの、いわゆるグローバルマインドを持つ生徒を育てるために、必ずしもSGHという方法がベストと思っているわけではありません。しかし外的な要因から、私たちはやはりこれを探らなければならなかった、学校の存続をかけて採る必要があります。一方でアカウンタビリティーや数値的な押さえをすることは、我々の学校では今までしてこなかったもので、新しい刺激にはなるのかなと思っています。では取り組みの詳細について、本校の山本教諭からご説明いたします。

世界の社会問題を手がかりにアプローチを試みる

SGH構想が教職員会議で議決された時、研究開発メンバーの希望者を募りました。その時、わたしの手は半分くらい心の中で挙がりました。しかし、私は今年還暦ですので、若い先生方に新しい考えや方法で取り組んでいただいた方が良くと考えて、思いとどまりました。でも、「グローバル」とか「インターナショナル」に弱いので、老骨に鞭打ってやってみようと考えたわけです。

これはドイツの風力発電所の写真です。牧歌的な写真で、私の原風景です。私はドイツ北部で勉強した後、師事していた先生に付き従って南下しました。ご存じのように、ドイツ連邦共和国は完全に原子力発電を放棄することを決定しました。日本の事故の影響です。それが私たちに

はできないのだろうか、これが私の「国際理解」講座のスタートでした。

初めは、開発教育研究の手法を用いて、さまざまな国の方々と一緒に何かできないだろうかという発想を温めてきました。しかし、あの原発事故から、日本はこれから原子力発電に頼るのか、生徒たちと一緒に考えてみようとしています。

世界的規模で見ますと、急激に風力発電が増えていきます。風力発電量などの自然エネルギーを見ますと、トップは中華人民共和国、次はアメリカ合衆国。日本は下から数えて4番目です。ただ私たちの国は、自然の力を使った発電に大きなメリットを持っているのではない、そんなことを考えながらSGHを発想していきました。

川井校長が説明しましたように、SGHの主旨は、コミュニケーション能力があり、社会課題に対する関心と深い教養があり、問題解決能力があつて、国際的

同志社国際中・高校教諭／SGH委員会

研究開発委員長

山本真司 やまもと しんじ

素養を身につけていて、将来国際的に活躍できるような人材をつくる。私たちの学校を巣立った多くの卒業生は、既にこのような立場にあります。ですから、私たちが敢えて何かプロジェクトをしなくても本当はいいのですが、先ほどから校長が何度も強調していますように、「国際」「グローバル」を冠している私たちの学校にとつては死活問題なのです。

入試担当者は、海外に飛んでいって、短い期間に色々な国を回って教育関係者や保護者と会って生徒をリクルートしている、本当に大変な努力をしているのですが、ICUや立命館宇治がSGHに指定されているのに、なぜ、本校が「アソシエイト」なのか説明するのが大変だったのです。私たちがいくら「国際的な人材を育てています」と言っても、客観的には評価されないのではないかと。しかし、これからは文科省が指定したのですから「お墨付き」の「国際」「グロ



育成」、京都市立西京高等学校は「エンタープライジングなグローバルリーダー」育成プログラムの開発」。

私たちの研究開発構想名は「持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム」環境先進国に学び世界に提言」です。「持続可能な社会を担う」、つまり化石燃料など既存のエネルギーにこだわらないグローバル人材育成プログラムをしよう。環境先進国に学び、世界に提言しよう。京都府や真庭市などの現場を視察し、生徒たちが実際にそこで学び、課

「バル」校と言うわけです。世間の目は残念ながら本質的な内容よりも見た目と言うことを肝に銘じておかなければなりません。

先日、校長とSGH校とアソシエイト校との懇談会に行つてまいりました。驚いたのは、「やらされている」学校が見受けられるということです。私学は指定を受けることに必死ですが、国公立はどこかという意識でやっている。特に国立は、採択されなかったら沽券にかかわるという雰囲気です。例えば、親しくしている他校のSGH担当の先生とお話ししたところ、「やらざるをえない」とおっしゃる。うまくいっていますかと聞くと、「校内のコンセンサスをとるのが大変です」と言う。結局、担当者が空回りして、ぶら下がりて授業をやったり、講演会をやつてみたり、大変な努力をされておられる。

集落の再生に学ぶ

本校がSGH校に決まったのは今年3月末ですが、もともと30年の歴史がある「国際理解」講座を、選択科目から必修

化することになりました。最初はなるべくベシッくなことから着手しようということで、少なくとも私たち教員側がテーマを決めて生徒たちに提示し、子どもたちがそれに対して何らかの興味を示すようにしようという発想です。

問題は、世界と地域をつなぐ、つまり自分のいる場所と地球を結んでいく考え方にふさわしい課題を何に求めるかです。お読みになった方がおられるかもしれないが、「里山資本主義」という新書がございます。NHKが特番を組み、岡山県で取材しました。そこで私たちが発見したのは、岡山県真庭市が地元の産業を中心にして「バイオマス」「エコ」といったキーワードで成功しているということです。なぜ集落が有効に再生したのか。私の中で真庭市のイメージと、冒頭にお話した、風力発電の広がるドイツの広大な土地のイメージが重なりました。私はドイツ南部に住んだことはありますが、南西ドイツには有名な街がありません。Freiburg im Breisgau、ヨロツッパでは有名な環境都市であるフライブルク市です。トラムが走り、CO2を削減して、住民が非常に「エコ」に暮らしている大

題を発見して解決方法を3年間かけて探り、それを、できれば国連レベルで提言していく。そういうことを具体的に考えています。

今年概念図をご覧ください。1年生で基礎を学び、2年生でオーストリアやドイツでフィールドワークを行い、3年生で論文にまとめて提言する。京都府・京都市に提言することになっていきますが、英語版を作つてUNEP（国連環境計画）とOECDに持つていく。どこまでできるかわかりませんが、最終的にはさまざまな機関に提言するイメージを持っています。

先日、ドイツのイゾルデという高校との交流があり、彼らがどんなことをしているかを、全校生徒の前で話してもらいました。その中で発表してくれた、自国の発電について少しお話しします。ドイツの構想では、2050年には少なくとも太陽光、風力、バイオマス、地熱という自然のエネルギーによる発電を全体の約半分にしよう、2100年にはほぼ3分の2を賄おうということになっています。ドイツはこの構想も本気でやっています。そういう本気の国の先進的事例を

学都市です。フライブルクに住んでいる留学時代の友人に連絡を取り情報をもたらしました。その結果、やはり「里山資本主義」にも登場するギュッシングというオーストリアの寒村が話題になりました。

最終目標は 国際機関への提言

採択されたSGH指定校の研究開発構想名をいくつか紹介します。例えば、東京学芸大学附属国際中等教育学校では「多文化共生社会の実現を支える組織力・対話力・実行力の育成」がテーマです。あるいは東京工業大学附属科学技術高等学校では「科学技術系素養を持つグローバルテクニカルリーダーの育成」がテーマです。青山学院高等部は「多様性の受容を基盤とする『サバントマインド』を持つグローバルリーダーの育成」。サバントマインドとは青山学院の校是、私たちが言えば「良心の全身に充滿したる丈夫」です。それを基盤にしてグローバルリーダーを育てる。また、京都府立鳥羽高等学校では「ソーシャル・イノベーションで挑むグローバル・リーダーの

学び、私たちも取り組んでいってはどうかということ、いま子どもたちと考えているところだ。

SGHの研究開発の目的は、誰が取り組んでもできるカリキュラムを開発することです。私たちの学校だけでできるものではなくて、普遍化できるカリキュラムでないといけない。同時に、先進的事例を踏まえた内容でなければいけません。また、目標の中には「経済面、行政面で矛盾がなく、実現可能な内容であること」という項目があります。夢を語るのは簡単ですが、実際にできるかどうかは非常に大きな問題になります。そして最終的には「提言内容が、他の国や他の地域においても応用可能な要素を含んでいること」としています。私たちも先進国から学んだことを咀嚼して、できることを京都などで行い、それをフィードバックしていくことを考えています。

段階的に生徒の関心を育てる

先ほど3年間の学習計画をご紹介しました。本校ではこのために、「総合的な学習の時間」に充てることにしました。

1年生は全員必修で「Global Understanding Skills (Basic)」。2年生、3年生には「選択科目として」「Global Understanding Skills I」「Global Understanding Skills II」を設置しました。当初、私たちは文科省の意図を読み間違えて、少数のいわばエリートを育てればいいのだろうと思っていました。20人とか30人とか、少なくとも定員の10%くらいの子どもたちをセレクトして徹底的に鍛えてリーダーにしたいのかと思っていました。ところが、ヒアリングで「国費を一千万円以上使って、20人ですか?」と言われました。「全員が対象でないといけない。なるべく多くの子どもたちにチャンスを与えてください」と言われました。

そこで、今お話ししたように、最初は必修でさまざまな実例研究をして、その中から希望を聞き、さらに学習意欲のある子どもたちを2年、3年の選択科目で絞っていく、ドイツやオーストリアへ連れていきます。なぜドイツとオーストリアなのかと、よく聞かれます。アメリカやオーストラリア、ニュージーランドにもふさわしい場所はあるだろうと。私の

留学先がドイツだったこともありすが、大きな理由としては、フライブルクはヨーロッパで最も先進的な環境都市であることが一つ、ギュッシングという話題の集落が真庭と同じように再生したことが一つです。のどかで非常に美しい地に、風力発電所がありソーラーパネルがあり、畑がある。素晴らしい光景だと思います。このプログラムは、実際には私たちだけでは手に余ります。例えば、高大連携の枠組みで、グローバル・スタディーズ研究科の小山田英治先生に講演をしていただきました。大変好意的に、高校生に分かりやすいお話をしていただき、子どもたちにも大変刺激になりました。小山田先生ご自身が色々な形で国際機関と関わっておられ、しかもインドネシアやフィリピンで働いておられたご経験もあることで主題が伝わってまいりました。

このような講演会や視察研修に関する費用はほとんどが文科省のSGH開発研究費で賄われます。他にもドイツ大使館、オーストリア大使館、JETRO東京本部の訪問研修があります。2年生の海外フィールドワークではどんなことができて、どんなコンタクトが可能なのか、あ

るいはドイツやオーストリアが自国で先進的な試みをどのようにされているのか、子どもたちが質問を用意して、担当の外交官に直接話を聞くという機会を作ろうとしています。

オーストリアのギュッシングでは、1995年段階では企業が皆無でしたが、20年間で50社に増えました。エネルギーコストは年間620万ユーロが域外へ流出していましたが、今では、逆に1300万ユーロが域内で循環するようになりました。税収は3倍になり、新規雇用者数が1100人になりました。これは実は、20年前の人口に等しいのです。つまり今は2200人を超える村人がいて、1300万ユーロをコミュニティの中で巡回させることができています。なぜか。ペレットなど地域に本来あった資材を中心にコミュニティで開発し、運用したり販売したり、さらにはボイラーを作って、コミュニティの外へ売り始めました。その結果、豊かなコミュニティになりました。ギュッシングはハンガリーとの国境にあり、オーストリアで最も貧しいと言われる村でした。その州に住む人たちはほとんど、その近くにある

街やハンガリーへ出稼ぎに行きます。それが今では逆に、ギュッシングに職を求めて地域外から人々が来るようになりました。その実態を見に行こうと思います。ウィーンから近いので、ウィーンに入ってギュッシングに行き、ドイツのフライブルクに行こうと考えています。フライブルクでは公共交通機関を市中に配置し、自動車や化石燃料を使った交通機関を市外に出しています。スイスでも見ることが出来るパターンです。

同志社の人材を結集してSGHを実現させていく

SGH授業は4人で6クラスを持っています。コンセンサスを得るために、授業をする前には必ず学習案を作り、4人で共有してから行うことにしています。日常の教育活動に加えて集まって知恵をしぼり、改めて意欲的に取り組むのは時間も力も必要ですが、お互い真剣に指導案を作っています。この取り組みを続けられ内部的な啓蒙にもなっていくのだろうと思いますし、最終的にはすべての教員がこのコースを担当できるようになる

のが、私たちの目標です。

私が関わって半年経ちましたが、子どもたちは素直についてきてくれますし、私も助かっています。最初私が委員会に誘われた時、教育モデルを一つ作ってみました。私は牧師で宗教の教員なので、当然ながら宗教という切り口でグローバルイシューを考えようとした。水とか発電とかは専門家ではありませんから。ただ、今も世界で起こっているさまざまなグローバルイシューは、宗教抜きでは語ることはできません。ですから、その部分をきちんと押さえるべきだろうというところで、いくつかのテーマを出しました。その中で、「いのち」というテーマを出し、「いのちを守って育む」というテーマから、当然ながら水や環境の問題やインフラの問題などが出てくるわけです。私は今まで関わってきた材料や人脈ですぐできることを並べました。その中から現在、いくつかを単元化して授業を実施しています。

私たち教職員は、学校内外での自分の経験や関係性の中でさまざまな仕事ができいていくということが、改めてよく分かりました。川井校長と参加した懇談会で

は、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校の担当の方と意気投合しました。これも林業が中心なのです。熊本と宮崎の県境です。何とかグローバル教育を実践したいということで、全寮制の学校を県が鳴り物入りで作りました。私はここに見学に行きたいと思っています。なぜかという、他の学校、同志社も含めまして、意外と謙虚というかシャイなのです。SGHのロゴをどんどん使ってアピールすればいいと思いますが、ホームページのトップページで大きく使っているのはここだけです。あの立命館でさえ、端の方に小さく出す程度です。こういうアピールがこれからはたぶん必要です。SGHのロゴは国際中高の教職員全員が名刺に印刷して、「グローバル」な学校としての存在価値を高めていきたいと思っています。